光明寺だより

第46号
浄土真宗本願寺派
光　明　寺

〒793-0030　西条市大町550
℡0897-53-4583

心に残る詩

ある障害児の母親の詩

あなたが私の子どもでなかったら
石を投げられた者の痛みの深さを
知らなかったでしょう
障害の重い人たちが
天使の心を持つことも
知らなかったでしょう
本当の愛も　思いやりも
富める人の貧しい心も
貧しい人の富める心も
あなたが私の子どもでなかったら
知らずに過ごしたはずでした
私の子どもに生まれてくれて
ありがとう

新盆合同追悼法要

8月13日・14日

第１回目　午後６時３０分
第２回目　午後８時

一口法話

「ものさし」のいらない世界

ここに『子どもたちよ、ありがとう』と題した一冊の本があります。

著者の平野恵子さんは、高山市にある浄土真宗のお寺の坊守（ぼうもり）さん（住職の妻）でしたが、平成元年、腎臓ガンのため四十一歳で亡くなられました。

本書は、病床の中から我が子に、仏さまの教えに出遭えたことの喜びを書き綴った手記です。

平野さんは三人のお子さんに恵まれましたが、長男（素行ちゃん）は、親の手に負えないほどの腕白な子で、二人目の子（由紀乃ちゃん）は、脳性小児麻痺による重度の障害を持った子供さんでした。

若い頃、平野さんはそんな子供を持ったことに深い絶望感を抱き、いっそのこと子供を殺し自分も死のうとまで思いつめていたそうです。

ところが、ある日のこと、いつものように元気に遊んで帰って来た長男が、身動き一つ出来ない妹を抱きしめて、「お母さん、由紀乃ちゃんはきれいだね。顔も、手も、足も、お腹だって全部きれいだよ。由紀乃ちゃんはお家の
みんなの宝物だもんね」と、こう言ったのです。

その一言が、平野さんの心の目を開かせたのです。

「気づいてみれば、由紀乃ちゃんの人生は、何と満ち足りた安らぎに溢れていることでしょう。食べることも、歩くことも、何一つ自分では出来ない身体をそのままに、絶対他力の掌中に抱き込まれ、一点の疑いもなくまかせきっている姿は、美しくまぶしいばかりでした。

抱き上げればニッコリ笑うあなたは、自分をこのような身体に生み落とした母親に対する恨みもせず、高熱と発作を繰り返す日々の中で、ただ一身に病気を背負い、今をけなげに生き続けているのでした。

由紀乃ちゃん、お母さんがあなたに対して残せる、たった一つの言葉があるとすれば、それは『ありがとう』の一言でしかありません。なぜなら、お母さんの四十年の人生が真に豊かで幸福な人生だったと言い切れるのは、まったく由紀乃ちゃんのおかげだったからです。・・・」

本書で、平野さんは人間の持っている価値観を「ものさし」と仰っていますが、この出来事を通して、彼女はその価値観が転換されていくことがいかに大事なことであるか、子供たちにこう語るのです。

「人間の持っている価値観は、時にはどんな恐ろしいこともします。若い頃のお母さんは、自分がそんな危ないものさしを持っているなんて気づきもしませんでした。

だから、自分勝手な偏見と色めがねで曇ったお母さんの価値観（ものさし）では、どんなに頑張って測ろうと努力しても、素行ちゃんは決してよい子の規格には入らなかったし、由紀乃ちゃんに至っては、人間として価値など、一つも認められない存在でしかなかったのです。でも二人は間違いなくお母さんの生んだ子供達、この世で最も愛しく大切な子供達だったのです。お母さんのものさしは根底から崩れ去りました。それは同時に、それまでのお母さんの人生そのものが、すべて否定されたということでした。

その時、絶望に打ちひしがれ、この子らを殺して自分も死ぬ以外に道はないとまで思いつめていたお母さんに『そのまんまが、尊いんだよ』と教えて下さった方があります。

『お母さん、由紀乃ちゃんはきれいだね、お家のみんなの宝物だものね』

素行兄ちゃんのこの一言でした。

幼い生命が二つ、お互いをお互いに宝物と拝みあっている尊い姿なのでした。

お母さんは足元にも及ばない、この穢（けが）れのない愛、いのちに対する共感がどこから来るのか、それはまぎれもなく仏さまの世界、浄土のものでした。

その時の素行ちゃんと由紀乃ちゃんこそ、真実を伝えるために、無量寿の彼方よりお母さんの子供として生まれてくださった仏さまだったのです」

これを、「回心（えしん）」と言うのです。まさに「ものさし」の価値転換が起るのです。

さらに彼女は子供たちに語りかけます。

「素行ちゃん、素浄ちゃん（三番目の子）、どうか忘れないで下さい。自分も、このものさしを持った人間であるということを。

いつでも、どんなときでも、自分は、ものさしを使ってものを考え、他を判断し、行動しているのです。どうあがいても、このものさしから一歩も出ることの出来ない私たちなのです。

ただ、ありがたいことに、ものさしを持つ自分の姿を確かに知ることが出来た時、人は同時に、ものさしのない世界を知り、その世界に触れることが出来るのです。浄土真宗では、このものさしのいらない世界を、阿弥陀の世界、浄土と申しております。

人は自分のものさし（価値観）を決して捨てることは出来ないけれども、浄土に触れることにおいて、ものさしを武器として、他を傷つけずにおれない自分の存在を悲しみ、その愚かさに気づかされることにより、まわりに対して、『ごめんなさい』『ありがとう』と言わずにはおれない人の心を取り戻すことが出来るのです」

思えば、私たち人間は、さまざまな経験や知識を通して生きる智恵というものを身につけてきました。そうして、その智恵が備わることによって、良いとか悪いとか、損だ得だという、自分なりの「ものさし（価値観）」を確立してきたのです。

その「ものさし」は、社会生活を営むために、なくてはならないものです。だから私たち人間は、それを捨てることは出来ません。

ただ、ここで大事なことは、そういうものさしを持たずにはおれない、そうして持つことによって人を傷つけずにはおれない、そうした人間の愚かさに気づいていくということです。それに気づかせてくれるものこそ、「ものさしのいらない世界（阿弥陀の世界、浄土）」なのです。

その世界に触れる時、平野さんが仰るように、心の眼が開かれ、人の心を取り戻すことが出来るのです。

笑って暮らそうね

平野恵子

泣いて暮らすのも一生
笑って暮らすのも一生
それなら　笑って暮らそうよ
ねぇ　あなた
いくら「生きていたい」って叫んでも
大声で泣きわめいても
自分の力ではどうにもならないのだから
与えられたいのちが尽きる　その時まで
精一杯がんばって生きたら
「ごくろうさん」と
あなたはきっと言ってくれるでしょうね
大好きなあなたにほめられたいから
涙を見せるのはやめましょう
そして
元気に笑ってみましょう
無量寿を生きる私です
生きてよし
死んでよし
ただ今を精一杯

平成元年４月

行事だより

－親鸞聖人７５０回大遠忌－

ご消息披露・記念法座が盛大に開催！

さる５月２６日、光明寺本堂において、親鸞聖人７５０回大遠忌についての消息披露と記念法座が厳かに行なわれました。

当日は四州教区教務所長はじめ、西条組内の寺院住職や檀家さんなど併せて８５名の参加者がありました。

今回の行事を通して、西条組内の皆さんに、改めて宗門長期振興計画への理解を深めて頂きました。〈★写真撮影は安永省一さん〉

（上図）会場の様子　司会は副住職

（上図）ご消息披露の様子
拝読者は教務所長

（左図）記念法座の様子　講師は村上義英師

（上図）お手伝いを頂いた皆さん

ー降　誕　会　法　座ー

さる５月２０日、本願寺中央相談員の橋本朗仁先生をお迎えして、「降誕会法座」が開かれました。

昨年夏、ブラジル仏婦大会に出講された時の模様を詳しく語っていただきました。

１００年前、ご夫婦で移住された方のお孫さんの話では、現在その一族が３００人を越えているとのことでした。後日、丹念に調べた一族の系図が先生のもとに送られ、当日その現物を披露していただきました。

お念仏のみ教えが､何代にもわたり遠くブラジルの地にしっかりと根付いていることに、深い感銘を覚えました。

（上図）移住者の系図を披露中

（上図）法座風景

感動！感動！　島田歌穂＆島健デュオコンサート

日本を代表するミュージカル女優・島田歌穂さんと名ピアニスト・島健さんによるデュオコンサートが、５月２９日行なわれました。

今回は２部構成で、第１部では、いのちと死をテーマにした朗読ミュージカル「少年フレディーの物語」でしたが、感動のあまり涙をぬぐう人も多くみられました。また第２部は、彼女のお得意のナンバーを熱唱していただきました。

（上図）朗読ミュージカルの様子

（上図）第二部のデュオコンサートの模様

趣味の広場

俳句を楽しむ（二十六）

森本隆を

五月に入ってどういう訳か天気がすっきりせず、気持ちのいい晴れの日が少ないようです。それでも山は新緑、野には草が茂り、満目の緑に心癒される良い季節ですね。そういう、自然に触れた時の感動がもっとも俳句に詠まれ易いし、事実そういう作品が多いのですが、今回は、人との出会いや別れを詠んだ句をいくつか紹介しようと思います。

懐かしや山人の目に鯨売り　原　石鼎

住居を定めぬ暮らしをしていた作者が、医院を開業していた実兄を頼って、明治末から大正始めの僅か二、三年のあいだ山深い東吉野に住んでいた時の句です。谷間の小さい集落へ海産物を商う人が鯨の肉を売りに来て、その出会いを詠んだ句ですが、劇的な場面でもなければめんめんたる心情をうたったものでもありません。しかし山奥の里に住む人にとって海の物を持ち海の話をしてくれる人が今年またやってきたのです。「おお、懐かしい人が来た。」という、一年ぶりの出会いの感情をそのまま句にしています。山里の人が一瞬嗅ぐ、太平洋の匂いです。

たとふれば独楽のはぢける如くなり　高浜　虚子

別れの句の代表である追悼句です。作者の同郷の俳人、河東碧梧桐の死去に際して詠まれた句です。正岡子規一門の双璧と称せられた二人ですが、子規没後、俳句に於ける二人の進む方向が大きく離れていきました。その二人の仲は、言うならば、二つ回っていた独楽が親しく近寄り、あい触れた途端にはじけ飛んだようなものだ、という気持ちを詠んでいます。前書にも『碧梧桐とはよく親しみよく争ひたり』と、その当時の事情を述べてあります。「独楽」が季語で、新年のものです。別れの句、といえば

雁やのこるものみな美しき　石田波郷

昭和十八年九月、召集令状を受け、家族や知人友人に心から別れを告げようと詠んだ句です。単に旅に出るというのではなく応召して戦地に赴こうとする作者の切迫した心情と、親しい者たちとの別れの情が残すところなく読み取れます。空を渡っていく雁。残るものみな美しいととらえた心。哀切感強く、格調高く、まことにすぐれた一句ですね。

また、出会いの句にもどりますが、

その道の人か利休の墓洗ふ　森田　峠

俳句を詠む人というのは、実は自然や人や、いろいろな物や事との出会いを求めて日常を過ごしているのです。素人もくろうともない、俳句を一句詠むということは、出会いを喜ぶ心や別れを悲しむ心、そして美しい自然にはっと目を見はったり、おいしいものに舌つづみ打つ、そんな一瞬一瞬を目や耳や舌でとらえ、文字にして表わすことです。この句が堺市の南宗寺でふと目にした一瞬の景です。おそらく和服の婦人が茶祖千利休の墓に参っている様子を目にし、「やはり茶道をたしなむ人かな」と頭の中をかすめたことをそのまま句にしたのでしょう。個人的な面識などないことは十分察せられます。

作ろうと思って周りを見回してもなかなか句は生まれません。買い物の途上、散歩のみちみち、いつでもどこでも、季物との出会いはあります。日常つねに句境、でしょうか。

住職書作品

「一期一会」ー色紙

古詩（「在家無事不労生・・・」）ー色紙

BOOK　本

出版　法蔵館
著者　平野恵子
定価　１２３８円（税別）

本書は、今回の一口法話で採り上げた平野恵子さんの著書です。

彼女の兄、和田正之さんが、「あとがきにかえて」で次のように語っています。

・・・「人間は貧しさや苦しさに耐えることは出来ても、空しさに耐えることは出来ない」という師の言葉が、今、妹の人生の歩みを通して鮮明に思い起こされています。

人間は、「空過を超える道」との確かな出遭いの中から、この身を尽くし切って生きる道が与えられるのです。そういう自己充足の道こそ、親鸞が求め、見極め、信知した念仏の道なのでありましょう。

そして今、七百余年の時の隔たりを超えて親鸞聖人の教言は、現代に苦悩する人間の心の奥深くに生き生きと感応することの、まぎれもない事実を教えられるのです。・・・

お知らせ

★新盆合同追悼法要
８月13日・14日
両日とも午後６時３０分より
各家には８月上旬にお知らせします

★バックナンバーのお知らせ
「光明寺だより」１号～45号
一部・・２５円（送料１２０円）
「テレフォン法話集」第一集～五集
一部・・３００円（送料１２０円）

「光明寺だより」を、ご家族の皆さんでお読み下さい。

言葉のプレゼント

父と出会った母
母と出会った父
両方に出会った僕

テレフォン法話

0897-53-4585

上のダイヤルを回してみて下さい。
住職の法話が聞けます！

話題

★５月20日の降誕会には30名の参拝者がありました。
（＊関連記事５ページ）

★親鸞聖人七百五十回大遠忌のご消息披露・記念法座が四州教区教務所長ご臨席のもと盛大に開催されました。
（＊関連記事４ページ）

★朗読ミュージカルと歌による島田歌穂＆島健デュオコンサートは、心に深く染み入る感動の舞台になりました。
（＊関連記事５ページ）

★中国の出版社から「安藤忠雄作品集」が刊行されました。光明寺も10ページに渡り詳しく紹介されています。

★月刊香川朝日（朝日新聞）の取材がありました。西条市の見所を紹介する記事とのことです。